



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.234
2023.3.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

—『日本先史土器図譜』と現在—

鈴木 正博

● 第50回 ● 加曾利B式研究の履歴書

山内清男の「日本遠古之文化」(昭和7年7月~12月・昭和8年2月の『ドルメン』に7回連載、昭和14年12月には50項目に及び補註付・新版)は「大別」と「細別」を武器とする「縄紋式全般の縦横観」を導出し、研究基盤としての『日本先史土器図譜』は年代別地方別に「文化の動向」を実態化する考古学的手段である「土器型式」研究を統括する。即ち、「日本先史土器図譜」は「土器型式」毎に研究史を総括した上で、層位別に可能な限り「全貌」が窺える「細別」標本を選定し、土器群の形態・装飾、及び全体構成を提示する等「土器型式」同定の提要を示しており、両書により日本先史考古学としての現代化が達成される。特に加曾利B式の層位による2「細別」から3「細別」へ、そして「曾谷式」へと進展する「土器型式」研究法は、今日ですら揺るぎの無い編年基盤である。

一方、敗戦後の復興から高度経済成長時代を経て山積された膨大な調査資料の

蓄積を前にした1980年代前後の加曾利B式研究は、初動として改めて『日本先史土器図譜』に問い掛けることになる。即ち、「日本先史土器図譜」の今日的役割とは何であり、新たな資料を前に果たしてそれは如何なる研究へと導く牽引力となり得るのであるのか、と。

この問い掛けが引き金となり『日本先史土器図譜』の行間を穿つ訓練が活発化し、そうした議論は蓄積された資料から地点的層位とSD法に基づき「範型」標本によるシーケンスの稠密的拡張化を目指すと共に、「類型」による集団の複合構成を見抜く先史社会論への高度化も志向する創見に至る。

そこで次回からは1980年以後に新展開する創見やその推敲も含めて現在の加曾利B式研究の到達点に触れるが、先ずは以下に研究の履歴を地方別年代新古別文献として網羅し参照の便を図り、以後は文献(1999a)等年代のみの指示とする。

<東北地方>

(2020)「縄文三陸地震津波再々論—縄文時代後期の山田湾津波と復興—」『2020年歴史地震史料研究会講演要旨集』、歴史地震史料研究会(齋藤瑞穂と共著)

(2014)「『防災・減災考古学』から見た船越半島の縄文土器ガイド」『山田湾まるごとスクールのしおり』、山田湾まるごとスクール事務局・新潟大学災害・復興科学研究所危機管理・災害復興分野

(2009)「相子島貝塚研究序説—大森貝塚から小名浜を観る地域間交流視点—」『福島考古』第50号

<北陸・中部・東海・近畿地方>

(1999b)「『先史考古学の復権』をめざす『笑う郷土史家』シリーズ(第1話)—「且来」は「キメラ」ではない!—」『利根川』20

(1999a)「『酒見式』への途—山内清男の「鈍行」列車に乗って北陸先史土器の旅を楽しむための行進曲—」『縄文土器論集』、縄文セミナーの会

(1986・2013)「縄紋式後期中葉の土器」『桜洞神田遺跡—桜洞神田遺跡発掘調査報告書—」(萩原町教育委員会(1986)の多数誤植の初校正版(2013)『実践!! パブリック・アーケオロジー—鈴木正博さんと馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム』)

<関東地方>

(2008)「大森貝塚の「加曾利B式」研究と馬場小室山遺跡—「半精製土器様式」から見た「馬場小室山系列」の位相—」『日本考古学協会第74回総会研究発表要旨』(馬場小室山遺跡研究会と連名)

(2005)「日本先史土器を読む：型式学と文様帯系統論、平成17年度埼玉県市町村埋蔵文化財担当者研修会専門研修資料(研修参加者配布資料)」

(2003)「古見台から遠部台へ—地域研究の進展によって姿を現した日本先史土器の新たな階段—」『新世紀の考古学—大塚初重先生寿喜記念論文集—』

(2002b)「千葉県を中心とした縄紋式後期中葉から後葉の「土器型式」」『千葉県立加曾利貝塚博物館平成14年度考古学講座「考古学入門講座II」—縄文時代中期から縄文時代晩期末まで—」(講座参加者配布資料)

(2002a)「第II部 南方遺跡(第5・6次)」・「第V部 まとめ 第3章 加曾利B式研究における南方遺跡第5次調査成果」他「さいたま市遺跡調査会報告書第4集 櫛谷遺跡(第9・10次)・南方遺跡(第5・6次)・南方西台遺跡(第2次)・行谷遺跡(第3次)—浦和市大門第二特定土地区画整理地内遺跡発掘調査報告—」

(2000b)「南方遺跡(第4次) 第8号住居跡出土土器 加曾利B式土器」他「各論2 南方遺跡の加曾利B式土器について」『浦和市遺跡調査会報告書第289集 櫛谷遺跡(第8次)・南方遺跡(第4次)・南方西台遺跡(第1次)・南方上台遺跡(第2次)発掘調査報告書』

(2000a)「南方遺跡(第3次) 第6号住居跡出土土器」・「第8号住居跡出土土器 加曾利B式土器」他「各論2 南方遺跡出土の加曾利B式土器について」『浦和市遺跡調査会報告書第274集 櫛谷遺跡(第7次)・南方遺跡(第3次)・南方上台遺跡(第1次)・行谷遺跡(第2次)発掘調査報告書』

(1998)「先史時代の水海道(II)—金土貝塚資料編(I)の解説：加曾利B式土器—」『婆良岐考古』第20号

(1990)「中妻貝塚—集会場建設予定地緊急確認調査概報—」、取手市教育委員会(共著)

(1989)「正網遺跡—荒川右岸における縄紋式後晩期遺跡の研究—」『富士見市遺跡調査会 研究紀要』第5号(共著)

(1987)「大倉南・武田新・古原—千葉県先史遺跡の再評価事始—」『古代』第83号

(1986)「大森貝塚の加曾利B式土器—資料補遺編—」『史誌』第25号、大田区史編さん室

(1984)「下総奉安楽寺貝塚の加曾利B1-2式土器に就いて」『下総考古学』第7号

(1981)「『加曾利B式(古)』研究序説」『取手と先史文化—中妻貝塚の研究—』下巻、取手市教育委員会

(1980e)「関東地方に於ける縄紋式後晩期の研究(3)—加曾利B式の変遷とその系統—」『日本考古学協会第46回総会研究発表要旨』

(1980d)「婚姻動態から見た大森貝塚」『古代』第67号

(1980c)「第III部 大森貝塚研究の諸問題 5 大森貝塚「土器社会論」序説」『大田区史(資料編)考古II』

(1980b)「第II部 大森貝塚出土の土器」『大田区史(資料編)考古II』(鈴木加津子ほかと共著)

(1980a)「第I部 大森貝塚出土の遺物 2 大森貝塚出土の土器・石器」『大田区史(資料編)考古II』

(1979)「取手と先史文化—中妻貝塚の研究—」上巻、取手市教育委員会(鈴木加津子と共編)

(1978b)「千葉県多古町桜宮遺跡の土器について」『古代文化』第30巻第10号(斎藤隆と共著)

(1978a)「加曾利B式に於ける微隆帯文土器について」『日本考古学協会昭和53年度総会研究発表要旨』

※巻頭連載は隔月です。次回は大村裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 加曾利B式研究の履歴書(第50回)
■考古学の履歴書 私の考古遍歴(第2回)

鈴木正博 …1
工業善通 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイパレット・サイト(第227回) 吉村璃来…3
■考古学者の書棚 『考古学概論—初学者のための基礎理論—』 山崎 慧…4

考古学の履歴書

私の考古遍歴 (第2回)

工楽 善通

第1回の私の遍歴では、明大卒後奈文研に就職した直後くらいの頃までの考古学との出会いについて駆け足で述べてきたが、ちょうどその頃京都では、日本考古学協会 弥生式土器文化総合研究特別委員会編の『弥生式土器集成 本編』の編集が佳境に入っていた。私はそんなことを全く知らずに東京で学生生活を送っていた。今回はその『土器集成』とのかかわりについてふり返ってみようと思う。

大学院へ入った1962年の夏、杉原荘介先生が平城宮跡の発掘調査に、8月に入ったら誰か行かないか、と希望者を募っていた。全国の大学で、考古学専攻生の居る研究室から参加するそうで、旅費は自分持ちで滞在費はゼロで良いという条件だった。私は関西出でもあるし、奈良に行けば坪井清足さんから滋賀里遺跡のことなど聞けると思い1人手をあげた。8月に入って奈良へ行ってみると、九州大、広島大、京都大、名古屋大、東大、東北大からそれぞれ1人が参加していた。宿舎は平城宮跡発掘調査事務所という現場に建つ瓦葺きの旧幼稚園舎を移築したものだ。賄付きの一部屋での、同じ釜のめしを喰う一団となった。仲間には本村豪章、都出比呂志、八賀晋、工藤雅樹さんが居た。

この合宿での発掘調査は8月いっぱいまで終わったが、私はしばらく残って手伝いをしていた。ある日坪井さんから、京都の小林行雄先生が君と連絡をとりたいたいと言っているの、手紙でも出すよと言われた。その返事は、冬休みに私が郷里の高砂へ帰省した際に、京大の陳列館にある弥生土器1ヶを実測して欲しいとのことであった。実測したこの土器は福岡県元岡出土の器台で、後に『土器集成 本篇I』に収録されている。後から思えばこの実測体験は、私がこれ以降『土器集成』に関わる登竜門であったと思っている。この頃小林先生の元には、各地から墨入れしたトレースの土器図が郵送されてきつつあった。

1963年夏も各大学から、メンバーは前年と少し入れ替って、平城宮跡の発掘に参加してきており、私も再度加わった。9月に入って小林先生から奈良の仕事が一段落したら、京都で数日間『集成図録』の仕事をしてくれませんかという依頼があった。私としては、秋頃から修士論文に取りかからないといけなそうと思っていたのだが、お受けすることにした。

9月末に京大考古学研究室へ小林先生を訪ねると、大学北門前にある「進々堂」というカフェに誘われ、そこで後々の仕事の内容など伺った。私のやるべき仕事とは、小林先生の所へ各地の担当者から届いた土器図の描き替えや部分的な修正が主であった。そのあと私が杉原門下であることから、「杉原さんの唱える「接触文化」を君はどう思いますか」という質問を受けた。これは1943年に出版された杉原先生の論文である『原史学序論』の中の「各論」第4章第4節「弥生式文化の東漸と接触文化の形成」で述べられた文言である。小林先生はこの「接触文化」という用語が気に入らないらしく、私にはこの用語は理解したうえで、使って欲しくないということのようであった。(注：1966年に小宮山書店から新装出版された『原史学

序論』には「各論」は収録されていない。)

この日からの京都での宿は、『土器集成』の印刷所であるコロタイプ印刷を専門とする真陽社近くの「花屋」という日本旅館をとってあると伝えられ、日暮れる前にそこへ向った。ここで約1か月近く滞在して、考古学研究室や北白川の小林先生宅の間を行き来して、図を受け取ったり、2~3日後に仕上がった図を届けるという日が続いた。小林先生の指示で、1頁大に貼り合わせた図の配列を仕替えたり、取り替えたりする仕事のほか、土器の輪郭は残して内側の文様部分やハケ目のみ切り取って描き直して貼り付けるなど、細かい作業も多く難儀した。ずっと座りばなしの毎日だったので、秋晴れの天気の良い日には、二条城や太秦広隆寺の散策に出かけたりして楽しんだ。後日、佐原さんにこの仕事のことを話すと「そうだろう、俺も紫雲出遺跡の報告書の作製で、図版作りや本文の表現方法、句読点の位置に関しても、小林先生からずい分注意を受け、それが後々ずい分勉強になったと述懐していた。

『土器集成』の編集が大詰めになった1966年9月、諏訪の藤森栄一さんの旅館「やまや」で編集委員会を開くことになり、藤森先生はもちろんのこと小林先生、杉原先生も出席され、幸い私も参加させていただいた。東北から伊東信雄先生も出席される予定であったが、急に欠席であった。この会は原稿を真陽社へ出す前に、各地方間の年代観の調整や、土器図の全体的なバランスなどを話し合う目的であり、小林・杉原両先生の間で、ずい分考え方に違いがあったようだが、小林先生の方が2歳上だということもあり、何とかうまく収まっていったのだと思う。本図録の出版は文部省の出版助成金をもらったの刊行であり、その資金獲得や、各地方の調査員動員などの点で、実力を発揮する杉原先生に小林先生は目置いていたようである。お2人は以前から東京考古学会員で、森本六爾の門下であったという強い絆があったからこそ、うまく気が合って進んでいったのだと思う。私はこの『集成図録』を手伝うことで、ずい分多くのことを学ぶことが出来た。欠席だった伊東先生からは後日、色々注文を書いた手紙が届いたことだけは覚えている。

『土器集成』が刊行となった1968年には、本篇I・IIの表紙の次頁に、小林行雄先生の署名入り本をいただいた。この2冊は2005年に私の他の蔵書と共に、ソウルの国立中央博物館へ寄贈し、その図書室にいまおさまっている。

略歴	
1939年	兵庫県高砂市に生まれる
1958年	兵庫県立高砂高等学校卒業
"	明治大学文学部史学地理学科入学
1964年	同 大学院修士課程修了
"	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ入所
1969年	文化庁記念物課へ出向
1973年	奈文研平城宮跡発掘調査部第2調査室へ配属
1992年	奈良研飛鳥資料館 学芸室長
1995年	埋蔵文化財センター長
1999年	奈良国立文化財研究所定年退職
"	(財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所勤務
2001年~2021年3月	大阪府立狭山池博物館館長

隔月連載です。次回は山本曜久先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 227

尖石遺跡 ～長野県茅野市

吉村 璃来

茅野市が位置するハケ岳西麓は、ハケ岳の火山活動により形作られた裾野を御嶽・乗鞍火山起源のテフラ層が覆った、東西に長峰状の台地が形成されている。また、近隣には和田峠や星糞峠に代表される黒曜石原産地が存在することから、ハケ岳西南麓の台地には縄文時代中期を中心とする数多くの遺跡が存在する。

中でも、茅野市は「縄文のビーナス」や「仮面の女神」などの愛称で親しまれる国宝土偶が出土した、棚畑遺跡や中ッ原遺跡、国指定史跡の上之段遺跡や駒形遺跡をはじめとした、縄文時代を代表する遺物や遺跡に恵まれている。

今回紹介する尖石遺跡はハケ岳西麓の標高1050～1070mの台地に位置し、市内の縄文時代中期の集落の中でも標高の高い場所に占拠する。北側には狭い谷を挟んで与助尾根遺跡と隣接する。南側には谷幅85mを測る広い谷を持ち、遺跡の名前は、その斜面に「とがひし尖石」と呼ばれる巨石があることに由来する。

「尖石」は火砕流噴出物の安山岩類が露呈したものと考えられ、高さおよそ1.2mの三角錐形を呈す、周辺に目立った岩のない場所柄、目を引く巨石である。その昔、尖石の下には財宝が埋まっていると信じた村人が、その下を掘り始めたところ、たちまち病で死んでしまったという話が地元で伝えられており、それ以降、尖石の下を掘ろうとするものはなくなったという。地元では「とがひしとがひしさま」と呼ばれ、近くには小さな祠が祀られており、尖石遺跡が広く知られるようになってからも、遺跡を象徴する存在であり続けている。

尖石遺跡は1893年、考古学に興味を持った地元の青年、小平小平治により、初めて中央の学会に報告された。しかし、その3年後に小平治が夭折したため、尖石遺跡が注目されることはなかった。1924年に刊行された『諏訪史』第一巻で遺跡の名称が正式に尖石遺跡と命名されると、信州を代表する遺跡として広く知られるようになる。

尖石遺跡の発掘調査は昭和5年から昭和17年にかけて地元で教職に就いていた宮坂英弼が精力的に行った。宮坂の調査は当初遺物の採集を目的としていたが、調査を重ねるにつれその目的は炉の発掘、住居の発掘、さらには縄文集落の解明へと移り変わっていく。

住居の発掘調査が始まった昭和15年から昭和17年当時は縄文の住居址の発掘事例に乏しく、また戦前・戦中のことでありながら、4人の息子とともに32軒の住居址の発掘を行った。この成果から尖石遺跡は「高原地における石器時代の集落地を示すも



▲発掘調査体験の様子

のとして著名」であるとして昭和17年に国史跡に指定された。

この指定により尖石遺跡での発掘調査は終了したが、戦後まもなく宮坂は与助尾根遺跡での発掘調査に着手する。しかし、当時は深刻な食糧不足の中での発掘調査であり、宮坂は妻と長男を失った。当時の宮坂家の様子は藤森栄一が「縄文中期の廃屋」と称したほどで、家中に土器が積まれ、宮坂は押し入れの中で休息をとっていたという。藤森がこの窮状を訴えたことで、宮坂は多くの協力を得て、昭和27年に与助尾根遺跡のほぼ全面的発掘が成し遂げられた。この年は尖石遺跡が国の特別史跡に指定された年でもある。その後、尖石遺跡と与助尾根遺跡の調査成果から縄文時代の集落研究が盛んにおこなわれ、与助尾根遺跡は平成5年に尖石遺跡の一部として、特別史跡の範囲に追加された。

昨年、令和4年は尖石遺跡特別史跡指定70周年の節目の年であった。この年、市教育委員会は尖石台地に営まれた縄文集落の広がり把握を、平成29年度、平成30年度に引き続き、指定地の西に隣接する民有地の範囲確認調査を行った。過去の調査から、令和4年度の調査範囲は集落の外であると考えられていたが、縄文時代中期の所産と考えられる貯蔵穴を含む土坑21基に加え、土器を伴う竪穴や方形柱穴列の発見があり、縄文集落が調査地まで広がることを確認した。

土器を伴う竪穴は柱穴と炉こそ検出されなかったものの、直径は3m程と推定され、その規模から住居址である可能性も考えられる。遺構に伴う土器は新道式期のもので、尖石台地に大規模な集落が営まれる以前の遺構であることが分かった。過去の調査から尖石台地の縄文集落の形成は西から始まり、徐々に標高の高い東側にその中心を移していったと考えられており、今回の竪穴の発見はこの考えを補強する重要な発見である。

調査では、市内の小中学生を対象に発掘調査体験や遺物の取り上げ体験を行い、その様子を尖石遺跡特別史跡指定70周年記念シンポジウム「特別史跡尖石石器時代遺跡 その価値を語る」の中で上映した。

尖石遺跡は小学生時代の私が縄文時代について興味を抱ききっかけとなった遺跡の一つであり、この遺跡の調査に携わったことは、感慨深いものがあった。この地で文化財行政に携わる者として地域の歴史・文化を守り、伝えながら、宮坂英弼をはじめとする先学の熱量を次世代へと継承し、新たな守り手を育む環境を作っていきたい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは平澤愛里さんです。



▲土器を伴う竪穴

考古学者の書棚

「考古学概論－初学者のための基礎理論－」

山本孝文・青木敬・城倉正洋・寺前直人・浜田晋介 著／ミネルヴァ書房(2022) 山崎 慧

大学に入学しておおよそ一年が経ち、後期試験も終わったころ、「冬休みに他大学との合同調査を行います。興味がある学生は申し出て下さい。」とのアナウンスがあった。「大学といえども、発掘調査というものは中々やらせてはもらえないものなのか。」と腐りかけていた私は、これ幸いと友人数人と調査に参加した。先生方や先輩、同輩と凍えながら平板に等高線を描いた。そこからは考古学にまみれていたように思う。夏の実習では友人とエンピ投げを競って練習していたし(たいして上達はしていない)、合宿で調査した際には、山間部の斜面を駆け巡り、朝から晩まで全員で揉みくちやになった。発掘現場は、刺激に満ちていた。平常の授業期間は研究室や先生方の部屋にお邪魔して、作業に参加し、色んな議論をした。現場で得たものは考古学の知識だけではなかった。先輩や同輩・後輩たちとの繋がりも大きかった。院生の先輩が、右も左もわからない私たちを神保町につれて行ってくれた。先輩のおすすめの本の話や専門にしている分野の話聞きながら散策をした。私自身が初めて手に取った考古学の本は鈴木公雄著『考古学入門』であった。ちょうど先輩のおすすめということを知ったばかりだったこともあり、古本コーナーで見つけた際には、すぐに手に取り握りしめて帰った。発掘調査に出たばかりであったこともあり、特に現場での遺構の見方に関わる理論の部分を詳しく読み込んだ覚えがある。

今回私が紹介するのは、前述の『考古学入門』同様の考古学の入門書である。『考古学概論－初学者のための基礎理論－』と『考古学入門』の大きな違いは、5名の大学で教鞭を執る教員によって執筆されたという点であろう。私自身入門書の類をすべて読んだ訳ではないが、共同研究などでなく入門書・概説書では単著あるいは二人程度の著者によって書かれたものが多いように思う。本書の著者5名は4つの異なる大学で教鞭を執っていらっしゃるが、共通した状況や認識があるように思われる。5名の思いが集められた本書は、著者たちから未来の考古学を志す初学者たちへのメッセージともいえる。

序章を含めて15章の構成になっている本書は、「はじめに」に記されているように「テキスト」としての構成が取られており、順番に読み進めることで少しずつ理解が進むようになっている。第I部である第1章～第4章では、考古学の基礎である用語・概念・プロセスを解説する。第II部では第I部で

学んだ基礎項目を用いた年代決定にまつわる内容を解説し、そして最後の第III部では遺構・遺物の解釈について解説を行う。第I部第1章などでは一般的なイメージに対しての解説がとても分かりやすく、かみ砕いて説明されており、慣れない90分を耐える学生への配慮を感じる。対して、第III部で触れられる内容は研究活動の骨格になる内容であり、丁寧に解説がなされている。また、本書は各部各章で内容をはっきり区別し、小見出しをつけるなど徹底して初学者に合わせた構成をとっている。

以上の本書の構成は初学者の理解度に合わせたものとなっているが、七つ設けられたコラムと付録が素晴らしい。コラムは比較的新しい考古学の分野の紹介や文化財に絡む職業への理解を促す内容が解説されている。また、付録では本書で取り扱った内容への更なるアプローチをするための書籍紹介と観点ごとの情報収集方法が記されている。付録1ブックガイドでは、各章の内容ごとに複数の本を挙げるほか個々の本に簡単な解説もついている。考古学の初学者には何ともありがたい道しるべである。

本書を読み進める上で共感する部分は多くあった。第3章「未来のための過去」の項目では「高校の教員から、「考古学は仕事ではない。考古学で飯は食えない」という誤った助言を受けた学生もいると聞く。」としている。筆者自身もそういった経験がある。こうした認識に触れる入門書は多くないと感じているが、正しい認識を広める上で重要な言及であろう。また先に挙げたコラムの内7つ目のタイトルは「考古学者として働く道」である。おそらく一年をかけて読み進めようであろう本書が、ある到達点としてではなく、考古学の世界へ入口であることを物語っている。

最近、職場で学生のアルバイトさんを迎える立場になった。コロナウィルス流行期に学生生活を送って来た世代であり、発掘調査の実習が行えないなど、苦労を強いられている世代である。彼らと関わる中で、改めて発掘調査の現場で得る経験値の大きさを感じる。私自身は幸運に恵まれ、学生時代から発掘調査に参加することで、埋蔵文化財に関わる仕事についているが、本書は初学者や入門間もない学生などにとっては、素晴らしい考古学への入口であり、また私のような既に考古学の世界にいる人間にとっては、その初心を思い出すことのできる一冊ではないだろうか。